

## 2005年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
 歩き初む子にあらたまの年の日矢  
 生え初めし皓歯きらりと初笑  
 泣初の子に大いなる未来あり  
 幸運を満たす朱塗の盃に屠蘇  
 乗初の窓に真白き富士のあり

横浜 川田 田鶴子  
 村人の鶴いる限り日々守る  
 親子鶴むつむ姿のうるはしき  
 鳴き交はし時に帰る鶴の群  
 降る雨に藪騒しるき鶴の墓  
 明日の餌を用意鶴守帰りゆく

十勝 高田 焔鳥  
 冬帝のふるさと十勝統べ給ふ  
 十勝野の降りつ吹雪つ暮れにけり  
 新巻をさばく力の妻にあり  
 短日の灯はなやかに飲み屋街  
 極月ののつびきならぬこと多し

十勝 西川 勝仙  
 登校の子らに挨拶息白し  
 安売りの列に加はり街師走  
 冬の夜や一行のみの子のメール  
 売られゆく仔牛鳴く声北吹いて  
 縄のれん馴染みの顔や師走風

世田谷 山本 静江  
 秋の日に栄華を残す守礼之門  
 星降る夜風雪の夜へて卒業す  
 子に胸を張りて迎へる卒業式

町田 小森 正彦  
 冬至日に勝っているよな月出でし  
 そここに電装灯る聖夜かな  
 年越しの蕎麦に暖借る東山  
 年の夜の道に火流る東山  
 新玉の陽光そそぐ京の街

町田 一ノ瀬公儀  
 絞め納めとして選ぶ冬ネクタイ  
 消防も控へ火高くどんど焼き

相模原 西澤 桃園  
 あどけなき巫女より破魔矢授かりし  
 初売りの娘囃しや纏振る  
 蓬莱といふ橋渡る大旦  
 運は神任せなりけり初みくじ  
 鳶の音の高く澄みたる初景色

## 2005年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
 装いの軽くこころのあたたかく  
 春光の森のふくらみなりしかな  
 下萌の弾み足裏を撥ね返す  
 はばたきをひかりにかへて春の鴨  
 良きことの待っていさうな暖かさ

十勝 高田 焔鳥  
 一夜明け二尺にせまる春の雪  
 除雪車の威力まざまざ目のあたり  
 わが路地に二尺の春の雪を搔く  
 ありがたし妻の雪搔き加勢かな  
 降りやめば雪見の酒の楽しみも

相模原 西澤 桃園  
 春潮や高速艇の水尾交り  
 分け入れば雑木の中に青木の実  
 春一番連山の樹々波打てり  
 春の潮伊豆南方は海に消え  
 春雷の先触れの風湖をわたる

十勝 西川 勝仙  
 鏡みて少し派手目の春着かな  
 草萌や歩ける足に感謝して  
 ふつくらと丘を彩る猫柳  
 ほろ苦く酒の肴の露の臺  
 空蒼く登ってみたき春の山

横浜 川田 田鶴子  
 四方より雛仲よく舟に乗す  
 声もなく舟音もなし流し雛  
 汐に透け沈みし雛の坐ります  
 海光の眩しさに雛見失ふ  
 雛流し波にたゆたふ小さき笛

町田 小森 正彦  
 教室に無言戒あり大試験  
 鉛筆の走る音のみ大試験  
 場違いの声道を行く大試験  
 神官の海に入るや若芽狩り  
 眼下なる信貴生駒山花の峰

2005年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
咲ききわめ黒薔薇黒くなりきれず  
色に酔ひ香に咽せ薔薇の園真昼  
母子像も乙女の像も薔薇囲ひ  
薔薇アーチぬけ贅沢な香に憩ふ  
色溢れ香りのあふれ薔薇盛り

十勝 高田 焜鳥  
二袋百円の花種選ぶ  
夢を蒔くごと花の種を蒔く  
苗床の手入れや何時の間にお昼  
あたたかやポットの苗を日溜りへ  
花鉢の手入れに倦みし遅日かな

横浜 川田 田鶴子  
コサージの薔薇の香れる花嫁御  
シャンデリア灯るロビーに薔薇香る  
アンネてふ薔薇に少女を偲びけり  
園巡り香るばら茶をいただきぬ  
豪華なる薔薇見て庭の小さな薔薇

町田 小森 正彦  
海渡る列車の汽笛風薫る  
谷下りる藤花の色は白  
赤色で始まる芽吹きでありにけり  
春昼や亀の甲羅は南向き  
二百種類一万本の七変化

2005年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
また違ふいたずらはじめ夏休  
母と子のないしよの話夕涼み  
還暦のいまだ末っ子墓洗ふ  
薬園の白き名札に秋の声  
秋の蚊の標的となりゐたるかな

十勝 高田 焜鳥  
コロポックル居さうな大き落を刈る  
石動(いするぎ)は父のふるさと南吹く  
大南風遠き友みな老いにけり  
大南風や海兵たりしわが昔  
蝦夷きすげ野の夕暮はゆるやかに

横浜 川田 田鶴子  
弧をえがく地平線まで麦の秋  
挽歌聞こゆ麦畑中の土壌かな  
夏帽の小孩守もる群家鴨  
上海の夏の夜に酔ふ古典樂  
ジャスミン茶飲みつゝ夜景の涼しき灯

町田 小森 正彦  
五月雨や女子大キャンパス華やけり  
中華街は色失はず五月闇  
香水の強き匂ひや街薄暑  
60年の余熱残せし原爆忌  
「君が代」は忘れてならぬ敗戦忌

2005年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
魚跳ねて潮の香秋を深めをり  
深秋や港に日差しありながら  
ブルースの聞こえてきさう窓の秋  
潮の香の風に色づく丘の秋  
仰ぐたび秋空深くなりゆける

相模原 西澤 桃園  
竿頭に吊られ一ツ目鳥威し  
秋郊や文久四年の道標  
蕎麦の花以前菜畑なりしかな  
干し柿の軒に吊るして留守の家  
山萩の露分くてゆく行者道

横浜 川田 田鶴子  
湖に水漬く立枯れ小鳥来る  
女の山の簪にも似て茨の実  
倒木の幹に沢なる月夜茸  
山の日松虫草の色淡し  
幾度か夜霧の襲ふ山の宿

十勝 高田 嶋鳥  
新涼の単線列車空いてをり  
鳴き兎われに秋声溶岩の屋  
足湯して湖の秋風ほしいまま  
秋めきし峡深くきてこの秘湯  
明日のこと明日にまかせて松手入

町田 小森 正彦  
みちのくの緯度ごとにある稲の色  
広げたる花弁たたむも華芙蓉  
退職を祝ぐ宴席の温め酒  
荒夜あけ一段の蟬時雨  
新しき眼鏡に代へて秋迎かふ

2005年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
山の日をこぼし時雨をこぼす雲  
ゆっくりと日をひるがえし朴落葉  
美しく燃へしものより散る紅葉  
君の踏む落葉の音につひてゆく  
散るもみち残る紅葉に染まりたる

横浜 川田 田鶴子  
諭されて帰りゆく娘や十三夜  
油染む愛用の櫛一葉忌  
下町の櫛屋なつかし一葉忌  
菊坂は我が通学路一葉忌  
一葉忌紙幣に面輪よみがえる

町田 小森 正彦  
唐辛子真っ赤になりて天を突く  
秋天に温泉街の湯気消ゆる  
秋潮という白波の上を飛ぶ  
山間の稲架の高きに日落ちぬ  
せせらぎの小石をけりて鴨飛べり